

比較語彙研究について

「意味分野別構造分析法」による「天声人語」の語彙分析を通して

宋正植（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）

songjeongsik@hotmail.com

0. はじめに

本稿では、田島(1994a)が提唱した比較語彙研究という新しい語彙研究の概念と、語彙研究の方法論である「意味分野別構造分析法」を紹介する。さらに、実際に、二つの異なる時期(1946年と2000年)に書かれた「天声人語」の語彙を対象にして、「意味分野別構造分析法」を施し、それぞれの語彙の持つ意味分野の特徴を示す。

1. 比較語彙研究の概念と意味分野別構造分析法

比較語彙研究とは、語彙を比較することである。ただし、この場合の比較とは文字どおり比べることで、言語の系統とは無関係である。語彙は「単語」ではなく、その「単語」の集合を意味する。英語で言うなら「vocabulary」のことであって、「word」を言うのではない。

比較語彙研究の目的は、言語と言語外部の事実との関係を把握することであり、窮極的にはその言語集団の文化とその根底に潜在している言語使用者たちの思考形態を明らかにすることである。

比較語彙研究では、語彙の構成要素である個々の語の意味的側面を重視し、その語彙にどのような語がどのような姿でその構成を成しているか、すなわち語彙の意味的特徴を明らかにする。比較語彙研究という概念は、既に阪倉(1960)の論文「万葉語彙の構造」と国立国語研究所(1964)の『分類語彙表』の前書きにも同じ考えが記述されているが、それを公に語彙研究の一方法として提唱したのは田島である。

田島は、『分類語彙表』の意味の一覧表を用いたこの研究方法を「意味分野別構造分析法(The Structural Analysis of Vocabulary with Special Reference to Semantic Categories)」と名付けた。この分析法は、語彙の構成要素である個々の語を意味分野別に分けて、語彙全体の構造を分析する方法である。具体的には『分類語彙表』の意味分類を基準にして研究対象語彙の個々の語に意味コードを付けてコード毎に、あるいは、いくつかのコード毎に集計して、どのような意味分野にどのような語があるのか、言い換えれば、意味分野別の語彙構造を観察する分析法である。

2. 比較語彙研究の対象

比較語彙研究において、なにより重要なのは対象語彙の選定である。まず、何を明らかにしたいのか、その目的をはっきりさせた上で、それを果たすためにいかなる対象を選ぶかを最初に決定する。

3. 語彙調査

比較対象語彙が選定されれば、その後は語彙調査に取り掛かる。語彙調査には、次の手順に従う。まず、語彙の調査単位として分割基準を立てる。次に、その基準に従い個々の語の分割作業を行う。そして、分割された個々の語にコード付けを行う。

3.1 調査単位設定及び分割作業

本稿における「天声人語」の語彙調査では、文節を第一次の調査単位とし、そこから、1つの自立語と、いくつかの付属語を析出する。田島(1997、1999)では、すでに、文節を第一次の調査単位として採用することが表明されている。本稿において文節を採用する理由はいくつかあるが、田島が指摘しているように文節が語彙調査に際して比較的容易に見出される単位であることが、最も主要な理由である。田島が言う文節とは、発話においてそれ以上短く切って発音すればその意味が喚起できないか、あるいは無意味になってしまう限界の最小の単位である。

3.2 分割された個々の語にコード付け

語彙をその調査単位によって分割し、それをまとめれば語彙表が出来上がる。次の段階は、完成された語彙表の各見出し語に、単語のコードを付けることである。「意味分野別構造分析」を行うためには、語彙の構成要素である個々の語にコードを付けなければならない。比較語彙研究で用いるコードには、単語コードと語素コードとがある。

単語コードとは、単純語・複合語を問わず単位語(1語)として付けるコードのことであり、語素コードとは、語の構成要素ごとに付けるコードのことである。これら2種類のコードは基本的に『分類語彙表』に従う。ただし、『分類語彙表』に収録されていない複合語のコードや付属語のコードなどについては、田島(2000)が田島・広瀬(1997)を基にして新設したコードに従うことにする。

4. 意味分野別語彙構造の分析法

個々の語の語彙表にコード付けをする作業が終わったら、次の段階は、「意味分野別」に語を集計し、該当する語彙の「意味分野別構造分析」を行う。

ところで、語彙分析の結果は細かな数字の表になるので、表を見てもどの部分に有意差があるかは容易には分からない。有意差を分かりやすく、客観的に指摘するためには統計的手法に頼らなければならない。具体的には、カイ二乗(2)検定¹⁾によって有意差のある部分を検出し、両語彙に関して、有意差の生じた項目を指摘しなければならない。

5. 意味分野別構造分析法による「天声人語」の語彙分析の結果

¹⁾ カイ二乗検定は、規模の異なるA、B二つの標本において、特定性質をもつものがA標本ではa例、B標本ではb例あり、特定性質のないものがA標本ではc例、B標本ではd例あったとした場合、それぞれの標本の規模を考慮に入れても、aとbとで差が認められるかどうかは分からないので、それを検定する統計手法である。

今回の「天声人語」の語彙分析の結果は、すでに発表した論文、宋(2003)「「天声人語」にみる意味分野別語彙構造 1946年と2000年との語彙比較を通して」(pp.173~195)の本文からの引用である。

5.1 「天声人語」の語彙調査

考察対象となる両年の「天声人語」に含まれている自立語の語数を延べ語数と異なり語数とに分けて示してみると、以下の表1のようになる。

表1

	1946年		2000年	
	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数
語数	4488	10282	4049	9712

5.2 意味分野別構造分析法による「天声人語」語彙の分析結果

表2

コード (意味分野)	意味分野別属する語	
	1946年	2000年
<0.230> (人種・民族)	国民(48)、日本人(24)、同胞(国民)・中国人(6)、華人・少国民・民族(3)、西洋人・難民・米国民・米人(2)、外国人(1)・外人・各人・窮民・居留民・市民・戦勝国民・戦敗国民・大国民・朝鮮人・町民・敵国人・田園生活者(都市・集落)・東京人・白人・文化国民など(1)、以下省略	住民・日本人(6)、市民(4)、国民・民族・同胞(国民)・村人(2)、セルビア人・モスラム人・外国人・韓国人・黒人・中国人・難民・米国民など(1)
<0.231> (人民)	大衆(5)、人民(4)、君側・大日本帝国臣民・民・老臣(2)、烏合の衆・区民・君臣・君民・庶民・日本人・報道陣・暴民・民衆など(1)	公衆・庶民・大衆・中三など(1)
<0.242> (軍人)	進駐軍(8)、軍人・兵士(6)、米空軍・軍属・兵隊(2)、エム・ピー・海軍大佐・凱旋将軍・外国兵・司令官・将卒・占領軍・大佐・大将司令・中将司令・復員軍人・復員兵士・米進駐軍など(1)	将校・兵士(1)
<0.274> (軍)	海軍(4)、陸軍・連合軍(3)、軍(2)、艦隊・機械化部隊・軍隊・軍部・東洋艦隊・部隊・兵団など(1)、以下省略	軍隊・部隊(1)

1946年は大戦直後の時代でもあり、表2でも分かるように、この時代には、特に<0.242>(軍人)と<0.274>(軍)の意味分野の語が豊富である。例えば、「進駐軍・占領軍・復員軍人・復員兵士・米進駐軍」などの語は、1946年という時代を如実に反映する語群である。

表3

コード (意味分野)	意味分野別属する語	
	1946年	2000年
<0.221> (友・なじみ)	恩人(1)	知人(5)、友人(4)、知り合い・恋人(2)、友・幼なじみ・僚友など(1)
<0.264> (事務所・)	自隠退蔵・銀行・本社(2)、闇市・闇市場・駅・駅々・技術院・	会社(16)、ミドリ十字・駅(3)、銀行(2)、TBS・TBSラジオ・さくら銀行さん・ソニ

市場・駅)	軍需会社・工場・市場・上野駅・ 停車場 株式会社など(1)	ーさん・トヨタさん・フラウ・プレスセンタ ー・ライバル社・ラジオ局・宇宙科学研究所・ 宇宙開発事業団・宇宙研など(1)、以下省略
<0.272> (公共機関)	牛津剣橋協会・警察・警視庁な ど(1)	警察(4)、警視庁(3)、県警(2)、芦浜原発・ 警察署・裁判所・女川原発・柏崎刈羽原発・ 発電所・保健所・労働基準監督署など(1)
<0.281> (クラス)	クラス(1)	学級(3)、チーム(2)、クラス(1)
<0.462> (電気器具)	ラジオ(2)、無電(1)	テレビ(8)、コンピューター(5)、パソコン (4)、ラジオ(3)、ビデオデッキ・ファックス・ ワープロなど(1)

表 3 から分かるように、2000 年は現代的語が多く、それが語彙に反映されている。例えば、<0.462> (電気器具) の項目では「コンピューター・パソコン・ビデオデッキ・ファックス・ワープロ」などの語が豊富である。また、<0.264> (事務所・市場・駅) の項目の場合は、会社の名前を言うのに「さくら銀行さん・ソニーさん・トヨタさん」など「社名+さん」が多く用いられている。

6. おわりに

比較語彙研究は、語彙の本来の性格である数量的側面と意味的側面を考慮に入れた新しい研究分野である。語彙を語彙として論じるためには、その前段階として膨大な量のデータを、膨大な時間を費やして処理しなければならない。しかし、このような段階を経てこそ、初めてある語彙に関するある事実を客観的データとして示すことができる。

比較語彙研究が世に十分認識されていないことや、実際の比較語彙研究による研究がまだ少ないことを考えれば、実践によってさらなる成果を示さなければならないであろう。そのために、まだまだ多くのデータを処理、蓄積していく必要がある。

参考文献

- 国立国語研究所 1964「国立国語研究所資料集 6」『分類語彙表』
- 阪倉篤義 1960「万葉語彙の構造 (その一) 名詞について」『万葉』34
- 田島毓堂 1994a「異文化、その比較と理解の一方法 語彙分類を通じての原理的考察」『国際開発研究フォーラム』1
- 田島毓堂篇 1997『比較語彙研究の試み』開発・文化叢書 21 名古屋大学大学院国際開発研究科
- 田島毓堂 1999『比較語彙研究序説』笠間書院
- 田島毓堂篇 2000「語彙研究方法としての「意味分野別構造分析法」のために」『国語と国文学』第六号 東京大学国語国文学会
- 申ミンチョル 2001「比較日韓語彙の比較研究 「小学生基本語彙」を対象としての試み」『比較語彙研究の試み 7』開発・文化叢書 37 名古屋大学大学院国際開発研究科
- 宋正植 2003「「天声人語」にみる意味分野別語彙構造 1946 年と 2000 年との語彙比較を通して」『比較語彙研究の試み 10』開発・文化叢書 40 名古屋大学大学院国際開発研究科